

天使の言葉

天 使また語りたまふ——

言葉は天に舞ひて五彩の虹を現じ、
地にひろがりて最と妙なる交響樂を奏すれば、
天童たちこれに和して

花爛漫の樹枝を手にし、

身に羅綾のいと妙なるを纏ひ、
翩翩として御空に舞へば、

花葩さんさんと地に降りて

地上はさながら妙樂の天園と化したりき。

さて天 使の言葉はのたまはく——

われは完き神の啓示者なり。

神の與へ給ひしところのものを

吾れも亦汝らに與へん。

神の語り給ひしところのものを

吾れも亦汝らに語らん。

吾れは創造神より遣はされたる者なり、

吾れは創造神の道なり、

吾れは創造神の波動なり。

吾れは創造神より來りて汝らを言葉にて照り輝かさん。
創造神の光波は吾れにして

吾が光波の射すところ

暗黒なく

病なく

老なく

死なし。

信ずる者は限りなき生命を得て永遠に輝かん。

我は創造神の言葉なればなり。

吾が言葉は吾が息の言ふ處に非ず、

神、我れと偕にありて、

吾れも亦吾が言葉の内に神の聲を聞くなり。

吾れは喇叭なり。

汝らよ——

吾れ個神を善しといふ事勿れ。

形に現れたる神を讃むること勿れ。

吾に宿る善きものは皆普遍なる神より來る。

汝ら吾が示すところの神を崇めよ。

吾れを崇めよといふには非ず。

吾れはたゞ天使なり、

吾れみづからの本性の神なることを觀たれば、

汝らの先づ悟らざるべからざる眞理は、

『我』の本体がすべて神なることなり。

汝ら億兆の個靈も。

悉くこれ唯一神靈の反映なることを知れ。
喩へば此處に一個の物體の周圍に百萬の鏡を按きて

これに相對せしむれば一個もまた百萬の姿を現せん。
斯くの如く汝らの個靈も

甲乙相分れ、

丙丁互に相異なる相を現ずるとも

悉くこれ唯一神靈の反映にしてすべて一つなれば
これを汝ら互に兄弟なりといふ。

すべての生命を互に兄弟なりと知り、
すべての生命を互に姉妹なりと知り、

分ち難くすべての生命が一體なることを知り、
神をすべての生命の父なりと知れば、

汝らの内おのづから愛と讚嘆の心湧き起らん。

されば汝らよ、

肉體の外形に捉はるること勿れ。

外形によつて兄弟を相隔つること勿れ。

外形は唯自己の信念の影を見るに過ぎず。

無限の生命が、

如何にしてか老い朽つべき肉體のうちに宿ることを得んや。

天使のたまへば——

翩翩としてみ空に舞へる天童たち

舞ひ終りて一齊に天使に對ひて一揖す。

此時天の童子のうちより、

緑色の羅綾にその玉の如き身を包める

いと臍だけたる一人進み出で、

『されど生命の長老よ』

と呼びかけて反問す。

『近代の科學者は頭脳にて物を思考し、
神經細胞にて物を感じるといふに非ずや。

頭脳なく、神經細胞なければ

如何にしてか、物を考へ、

物を感じることを得べけんや』と。

天使再び答へ給はく——

汝ら、『肉體細胞』と呼ぶ

物質のうちに快あり苦あり感覺ありと思ふは虚妄なり。

肉體は本来『無』なるが故に、

それはたゞ想念の影なるが故に、

吾らが肉體を忘れて忘我の境にあるとき、

吾らの肉體は最も完全にその職能を發揮するなり。

肉體はその背後に『心』ありて

想念のフィルムを回轉して

『現世』の舞臺面に肉體の映畫を現せるに過ぎず。

汝ら自己をば肉體なりと観ずる夢を破れ。

現世に於ても優れたる科學者は

人間を肉體なりと観せず、

感覺は肉體の背後にある心の感じなる事をあきらかにせり。

嘗て伊太利の大醫ロンブローゾが

或る神經病者を取扱ひし記録を見ずや。

患者は感覺の轉位を起して

眼球をもつて物象を見ることを得ず、

指頭をもつて物象を見ることを得しにあらざや。

指頭には眼球なく、

網膜なく、
視神経なし、
されど彼の指頭はよく物象を見ることを得しに非ずや。

この事實は、
感覺が肉體になく、
神経細胞になく、

その背後にある『心』に在ることを立證するものなり。

『心』にしてみることを肯んずれば、
指頭も尚物象を見るを得べく、

また其の指頭すら無くして

なほ物象を見、ものを聞くことを得べし。

天眼天耳と稱するもの即ちこれなり。

かの楽聖ベートーヴェンの

有名なる諸作品は

彼の肉體の耳聾ひて

物體の音響を殆ど辨別し難き晩年に到りて作曲せられしに非ず
や。

彼の肉體の耳は聾ひたれども

心の耳ひらけたれば、

こゝろの耳はピアノの鍵盤に觸るるに從ひて

その微妙なる奏曲を分別し得たるなり。

かくの如く人は

心だに肉體に捉はれざれば

眼なくして物を見、

耳なくして物を聞き、

體なくして物に觸るることを得るは事實にして理論にあらず。

この時、天の童子反問す——

『主よ、眼なく耳なくして、物を見、物を聞くを得るは聞きし
ことあれども、

體なくして物に觸るることは不可能にあらずや』と。

天の使こたへ給ふ——、

汝ら近頃の心靈科學の實驗を見しことなきや。

被實驗者は椅子に緊縛せられて一毫もその肉體は動く能はずし
て、

尚、凝念の力によりて

或は机を空中に浮揚せしめ、

或は手風琴を空中に飛翔せしめ、

或は空中のメガホンより聾を出ださしめ、

或は空中より手風琴を奏せしむることを得、

これ體なくして物に觸れ物を動かし得る實例なり。

心が『物』を動かすことを得るは

『物』と心とが全然別物に非ずして

『物』は『心』の痕跡なるが故なり。

例へば美術家が巧みなる繪を描くに

繪は美術家の心の痕跡にすぎずして、

繪は美術家そのものに非ざるが如し。

斯くの如く人間の肉體も人間の心の痕跡にして

人間そのものには非ざるなり。

念に従つて、

肉體の相貌或は美しく或は見苦しく變化し、

健康もまた念に従つて變化す。

人この理をさとれば

意のまゝに自己の肉體を支配して變化せしむることを得ん。
迷妄はいふ『人とは肉體也』と。

されど肉體は人には非ざるなり。

『人』の實相は神の子にして、
生きとほしの生命なれば

生滅つねなき肉體を以て代表せしめ得るものには非ず。

すべて生滅常なきものは

實體に非ずして

たゞ信念の反映に過ぎず。

信念を變ふればまたその相も變化せん。

物質は事物の實相に非ず、

たゞ念に従つて生滅す。

物質は念の影なるが故に、

それ自身意識を有せず、

感覺を有せず、

痛みを感じず、

病を感じざるを本性とす。

然るに物質にあり得べからざる痛苦を

物質なる肉體が感ずるは、

唯『感ずる』といふ念あるが故なり。

肉體に若し催眠術を施して

彼の念を一時的に奪い去れば、

針にて刺すとも痛みを感じず、

メスにて切るとも痛みを感じず、

無痛刺針、無痛施術等自由自在に行はるるに非ずや。

『念』全く去りたるものを死體といふ。

汝ら死體が痛みを感じたるを見しことありや。

死體は『念』去れるが故に痛みなきなり。

『念』に従つて一つの組織を現せるもの

この『生ける肉體』なり。

されば『生ける肉體』は念に従つてその状を變ず。

『健』を念ずれば身健かとなり、

『病』を念ずれば身に病を現す。

されば汝ら常に『健』を念じて

『病』を念ずること勿れ。

若し、汝の『念』肉體を去れば、

生ける肉體死體と變じ、

死體はその状態を維持する『念』の力の去ると共に、

分解して宇宙の要素に復歸せん。

肉體を去りたる『念』は、

その念の力にてなほ一つの個性を持續し、

幽界に於て生活をつゞけん。

汝らの靈魂と稱するものは是にして、

『念』の淨まるに従つて

それに相應はしき高き靈界に入り、

『念』の淨まらざるものは、

それに相應しき環境を『念』の力にて假作し、

その環境に於て苦しまん。

されば汝ら、
常に心を高く持して

苟も悪を念ずること勿れ。

苟も不浄を念ずること勿れ。

また苟も苦を念ずること勿れ。

また苟も病を念ずること勿れ。

悪と不浄と苦と病とは、

神の創造り給ひしものに非ざれば、

たゞ汝らの『念』の妄想せる幻に過ぎざるなり。

汝ら暗を見て、

暗を實在すと信ずること勿れ。

暗は唯是れ光の非在に過ぎず。

悪と不浄と苦と病とは

たゞ神の創造の無をあらはす。

神の創造なければ

其處に實在なし、

實在の『無』——これを稱して悪といひ不浄といひ苦といひ

病といふ。

されば汝ら何の故に實在に非ざる苦しみを恐るるや、

何の故に實在に非ざる病を恐るるや、

暗の中にもて恐怖すれば

枯尾花も幽霊の姿を現す。

斯くの如く心の暗の中にもて病を恐怖すれば

非在の病も實在の如き姿をもって現れん。

されど病は實在に非ずして

たゞ恐怖の反映に過ぎず。

心の暗の中に光射し來りて

汝らの恐怖心消ゆるとき

病はおのづから自消自滅して本來の『無』を露はさん。

されば汝ら、

心の中に常に圓滿完全清浄なる實在の相を描けよ。

常に圓滿完全無病なる神の子の相を描けよ。

人は神の子にして其のほかの何者にも非ざるなり。

圓滿完全なる神より不幸は生ぜず、

圓滿完全なる神より病は生ぜず、

不幸と病は唯これ五官の妄想に過ぎざるなり。

汝ら病を恐ること勿れ。

五官の感覺に描かれたる病は

一毫も汝らの生命の實相を病ましむること能はず、

一毫も汝らの生命の實相を不幸ならしむること能はず、

如何なる病も

如何なる不幸も

たゞ『生命の實相』の表面を掩へる

叢雲の如き幻に過ぎざるなり。

その幻はすべて

『生命の實相』を知らざる迷より生ず、

汝ら『生命の實相』を知り、

迷滅すれば恐怖滅し、

恐怖滅すれば

一切の不幸と病おのづから滅せん。

かく天^{てんのつかい} 使語り給へば――

虚空に蓬萊島の如き理想郷實現し

島の頂には水晶にて造れる宮殿ありて

その臺^{いづか}も柱も悉く水晶なり。

天^{てんのつかい} 使その主座に坐し給へば

天童たちその臺を透過きて天より舞ひ降りて

悉く天^{てんのつかい} 使の周圍に輪を描く。

此の時いづこともなく天樂の音囀^{ねりゆり} 唳として聞え、

天童これに和し羅綾を流れの如く引いて舞へば

島をめぐれる紺^{こんじょう} 青の海に

ヴェニス^{ヴェニス}のゴンドラ船の如き

半月の船静かに迂りていと平和なる状態なり。

此の時天^{てんのつかい} 使の聲水晶宮より出でて虚空に轟き、

地を指して宣はく、

『見よ、これ實相世界なり、

實相世界は父の國なり、

天國なり、

淨土なり。

父の國には住居多し。

實相世界の住居は悉くこれ「生長の家」なれば

住民に飢ゑなく、

悲しみなく、

争ひなく、

病なく、

萬の物ごとごとく意に従つて出現し、

用足りておのづから姿を消す。

圖満具足清^{えんまんぐそくしょうじょう} 淨微妙の世界

これ實相世界、

これ汝らの世界、

そのほかに世界あることなし。』

斯く天^{てんのつかい} 使の宣ふとき、

天^{てんのつかい} 使の指し給ふ方を見れば

『生長の家』無数に建ち並びて

臺^{いづか}列をなし

炊煙春の霞の如く棚引きて

住民悉く鼓腹撃壤し、

其處はたゞ常樂の世界を現じたりき。

努力の再吟味

この大努力の天才を前にして、「人間には努力が必要か」という問題が再吟味されることになりました。伊東種さんは「努力なんか要らない。努力などという力みのないところに本当の生命の流れがある」とおっしゃるのでした。佐藤彬さんは伊東種さんを評して「努力なんか要らない、要らないといいながら、伊東さんほど努力している人はない」といわれました。山根八春さんは、「人は私を天才だといわれますが、わたしには天才はありません。わたしは自分に天才がないということに気づいたから努力しなればならないというので努力に努力を重ねてきました」といわれました。伊東さんのおっしゃるところも、山根さんのおっしゃるところもわたしには結局同じように受け取れました。わたしは盛

岡の座談会で誰かがおっしゃった「自分は大通りのアスファルト道に三寸幅ぐらいの白線を引いて、それを踏みはずさないように自転車で走れといわれたら、それはなんの雑作もなくできます。しかし、かなり広い河の上に三寸幅の板を渡してその上を自転車で乗り切れといわれたらたいい失敗して墜落するだろうと思います」という言葉を引用して説明しました。「同じ三寸幅でも大道の上に描かれた白線だと少しも踏みはずさないのに、河の上に三寸幅の板があったらなぜ踏みはずすのでしょうか。努力という言葉は大変よい言葉だけれども、なんだか『困難』というものの実在を認めて困難と戦っているような感じのする言葉ですね。

『困難』だと認めて、その困難を克服するつもりで行動することを『努力』と称するとしたら、これは河の上に架けた三寸幅の板を渡ることになります。『これは困難だ』とまず認めているから墜落しやすいのです。ところで同じ仕事でもこれを困難だと認めないでスラスラやる——こういう場合『困難を克服すべく活動する』という意味が『努力』という言葉だったら、それは努力という字は当てはまらないことになるでしょう。それは大道の上のチヨークの線をスラスラとただ当たり前に渡ることになるのです。人から見たら活動しているのだから努力していると見えるかもしれない。しかし自身にとつては努力というほどの力みはない。ただスラスラと生命の動くままを妨げずに活動していることになっているのです。努力していないといっているながら、そばから見たら努力しているように見えるとはこういう人なのでしょう。ただスラスラと生命の動きのままに活動する時その人の生命は最も伸びやすいのです。われわれは仕事を『河の上にある細板』だ

とは見ないで大道の上に引かれた線であって、落ちっこないと信じてすらやらなければならない。それは大道が自分を受けさせていてくれると信ずるから失敗しないのです。仕事をする上に、自分を受けさせられていくる大道とは『神』のことです。神の全能力がわたしを導き、わたしを受けさせられていくるから失敗はないと、努力という言葉もふさわしくないほどに、晏如あんじよとして仕事に従事するとき、困難というものを仮敵として努力するよりもなおいっそうその人の仕事は伸びると思えますねえ」とわたしは話したことでした。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社